

2024 年度(令和6年度) 学校評価自己評価表

城西中学校区	校番 58	福山市立山手小学校
最終更新日		2025年(令和7年)2月1日

I 福山市

ミッション ビジョン	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している
---------------	---

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型スキル&倫理観)	コミュニケーション力・表現力・忍耐力
○学習に対する取組みでは、各校とも児童生徒が意欲的に授業に取り組んでいる様子が見られ、一定の成果が出ている。 ○これまでできなかった様々な活動や行事ができるようになり、子ども達が生き生きとしており、楽しく学校生活を送っていると感じられる。 ●読書活動や書く活動など、小・中学校が連携して取り組むことで、児童生徒の読む力、表現力の向上を図っていくことが大切である。	「子ども主体の学び」を目指し、小・中学校が連携して研究・実践を行い、授業改善を進めており、児童生徒の授業に対する意欲、積極性は高い。 ○行事等を通して、小・中学校とも集団づくり、児童生徒の主体的な活動に取り組んでおり、意欲的に頑張る児童生徒は増えている。 ●読書活動や書く活動の充実に取り組み、児童生徒の表現力を高める必要がある。 ●小・中学校が緊密に連携し、引き続き不登校生徒減少への丁寧な取り組みが必要である。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	地域に愛着と誇りをもち、心豊かにたくましく生きる子ども
		中学校区として統一した取組等	○自己肯定感を高める（小中合同ボランティア活動・中学校オープンスクール） ○コミュニケーション力・表現力・忍耐力をつける（校区公開授業研究） ○健康への意識を高め、体力向上を図る （体力向上の取組・体力テストの分析・生活改善の取組・校区保健だよりの発行）

III 自 校

ミッション				育成する力 (21世紀型スキル&倫理観)	コミュニケーション力 ・ 表現力 ・ 忍耐力	
『元気』と『笑顔』あふれる やまて				めざす 子ども像	全 学 年	○児童が、自分自身を理解するとともに、お互いを認め合い、高め合っている
学校教育目標						○児童が、自ら疑問や課題を見つけ、解決に向け自分や仲間と意欲的に調べたり考えたりして、学び続けている
自ら学び 心豊かに たくましく生きる児童の育成						○児童が、自分たちの生活をよりよくしていくために、積極的に考え、取組を企画し、仲間と協力しながら、粘り強く取り組んでいる
現 状				研究	テーマ	○児童が、地域の行事やボランティア活動に積極的に参加し、地域の人たちと協力して、地域を笑顔にしている
児童が主体的に、「学び」を深めたり生活をよりよくしたりしていくために、児童が「夢中になる授業」づくりや互いを認め合える集団づくりに取り組んできた。その取組を振り返り、改善していくための指標とするために、アンケートを全児童対象に実施した。						子どもたちが「夢中になる授業」をめざした、子どもたちの「学び」と先生たちの「学び」をつなぐ授業づくり
〈肯定的評価〉						■「学び」のつながりはあったか 〈子どもたちの「学び」〉 ○主体的に学ぼうとする姿があり、学習内容(単元・「本時」)のねらいにせまり、「学び」の面白さを味わうことができたか 〈先生たちの「学び」〉 ○そのための「教材研究」はできていたか
学校が楽しい				内容等	めざす授業の姿	○主観的に学ぼうとする姿があり、学習内容(単元・「本時」)のねらいにせまり、「学び」の面白さを味わうことができたか
授業で考えることがおもしろい						○そのための「教材研究」はできていたか
わたしには、よいところがある						・ 学習活動が主体的・自律的である
友達や家族、先生に「ありがとう」と言われたことがある						・ 明確な課題意識をともなった活動である
児童会目標を達成するために進んで取り組むことができた						・ 目標達成、及び、課題解決への営みが持続されている活動である
導入の工夫や振り返りを充実させること、他者評価場面を日常的に仕組むことなどにより、児童の学習意欲や生活意欲は高まってきている。しかし、学力の定着には至っておらず、児童の主体的な企画・運営は十分とは言えない。教職員のよさや個性を生かしながら教材研究、挑戦を進め、児童が様々な場で自身の「伸び」「成長」を実感できるように取組を進めていく。						・ 目標達成、及び、課題解決に役立つ情報に敏感になっている
						・ 目標達成、及び、課題解決に見通しを持って取り組み、期待が持てる活動である
						・ 活動の経過とともに、はっきりと成果物などの変化がある

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立山手小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力以 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力以 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
4	主体的・ 対話的 で深い 学びに よる学 習意欲 と学力 の向上	★	継続	自身の 「伸び」を 実感でき る児童の 育成	◇導入の工夫 と振り返り の充実を行 う ◇児童の実態 把握を行い、 スモールス テップでの 指導や少人 数での指導 を取り入れ るなどにより、児童の学習意欲の向上を図る	■児童アンケートの 自己肯定感に係る 質問に肯定的な回 答をした児童の割合を前年度(90%)以上にする ■学力を伸ばした児童の割合を前年度(国語72.4% 算数73.7%)以上にする ■学力調査正答率40%未満の児童の割合を前年度(国語24.3% 算数27.7%)以下にする	□生活と結びつくような導入や見通しがもてるような導入を行ったり振り返りの書き方を提示したりした。児童アンケートの自己肯定感に係る質問に肯定的な回答をした児童は92%であり、評価指標を達成することができた。 □学力を伸ばした児童の割合は国語59.7% 算数64.7%であった。評価指標を達成することができなかったが、福山市の平均と比べると国語は4.1%、算数は9.2%上回る結果となった。今年度、初めてタブレットで調査を実施したため、タブレットの操作に慣れていないことも指標を上回ることができなかった要因の1つと考えられる。 □学力の伸びを把握する調査正答率40%未満の児童の割合は、国語25.83%・算数28.56%であった。評価指標に国語1.53%・算数0.86%及ばず、達成することができなかった。	3	3	・児童の中に疑問が浮かぶような導入や具体物を活用した導入をするなどさらなる導入の工夫を行う。 ・振り返りを交流したり提示されたキーワードを使って振り返りを書いたりするなど、自分の学びを整理して表現することができるようにする。 ・基礎的基本的な学力の定着を図るため、週2回、学力補充の時間を確保する。 ・授業や宿題などで積極的にICTを活用し、タブレットの使い方に慣れるようにする。 ・「選択肢」「自己決定」「体験的に学ぶ」の3つを取り入れた授業を展開し、学習意欲の向上を図る。	□視覚資料を用いたり最終ゴールを示したりするなどの導入の工夫を行った。アンケートでは、92%の児童が「授業で考えることが面白い」と回答した。振り返りについては、87%の児童が「授業の中で書いている」と回答しており、自分の学びを整理して表現しようとしている。 □週2回、学力補充の時間に繰り返し学ぶ中で、基礎的基本的な力の大切さを児童自身が意識し始めている。 □ICTに関わる職員研修を定期的に行うことで、授業の中で活用する機会が増えつつある。 □結果分析取組シートを再考し、「自己決定」「体験的に学ぶ」の2つの視点を取り入れた授業を展開していった。実際に触れながら学んだり、課題を選択したりすることで、意欲的に学ぶ姿が多くみられるようになった。	3	3	3	・振り返りの際にどのように書いたら良いか分からず、困り感を抱いている児童も見られる。振り返りの書き方の例を示したり、振り返りの仕方について再考したりし、児童が自己の学びや伸びを実感できるようにしていく。 ・基礎的基本的な学力の定着を図るため、引き続き、学力補充の時間をとる。 ・互いの授業を見合うなどし、「自己決定」「体験的に学ぶ」の2つの視点を取り入れた授業やICTを活用した授業の具体を全職員で共有していく。
2	自己指 導能力 の育成		継続	よりよい 学校生活 にしてい こうとす る児童の 育成	◇「あいさつ」を通して、他者と積極的に関わる雰囲気づくりを行う ◇相互評価、他者評価場面を日常的に仕組むとともに、感謝の気持ちを伝え合うことを通して、自己肯定感を高め、互いを認め合う集団づくりをする	■「気持ちのよいあいさつをしている」と答える児童の割合を90%以上にする ■「先生や友達に『ありがとう』と言ったり、言われたりしたことがある」と答える児童の割合を100%にする	□児童会役員による挨拶運動を行ったり児童会の月目標として全校で取り組んだりした。「気持ちのよいあいさつをしている」と答える児童は93%で目標を達成している。 □「ありがとうカード」を全員に配布し、「ありがとう」に対する友達や先生への相互評価を行うことが出来るようにした。「先生や友達に『ありがとう』と言ったり、言われたりしたことがある」と答える児童の割合が97%であり、目標を達成していない。低学年で否定的な意見を出している児童が多く、「ありがとう」などの感謝の言葉を日常的に使えていなかったり、感謝の言葉を認識していなかったりしていることが要因として考えられる。	3	3	・引き続き月目標として啓発するなどの取組の中で日々達成率を振り返りながら取り組ませる。自ら気持ちのよいあいさつをすることのよさを伝える。 ・「ありがとうカード」を達成した児童を集会等で継続して紹介することで意欲をもたせる。感謝の言葉を伝えることができた際にその場で評価することで自己認識しやすくなる。	□児童会目標として、挨拶レベルを作成して取り組んだ。後期のアンケートでは、「気持ちのよいあいさつをしている」と答えた児童の割合は、90%で目標は達成したが、前期と比べて3%減少した。気持ちのよい挨拶への意識が高くなり、自己評価が下がった児童がいた。また、誰にでも挨拶をすることのよさを感じさせることも十分でなかった。 □「先生や友達に『ありがとう』と言ったり、言われたりしたことがある」と答えた児童の割合は97%であった。特に低学年で否定的な意見があり、児童一人一人へ感謝の気持ちを伝えることのよさを感じさせることが十分でなかったと考える。	3	3	3	・「あいさつ運動」を定期的に行之い、あいさつをすることへの意識付けを行う。 ・集会や児童会キャンペーン、たて割り班を活用し、様々な学年の児童が交流できるような「場」を設定し、あいさつから仲間づくりができるよさを感じられるようにする。 ・教員から積極的に様々な学年の児童に声かけを行い、「ありがとう」が日常的に使われる土壌づくりを行う。

				自己の健康と体力を高めるために	◇自己目標を設定する ◇外遊びを促すキャンペーンを設定するなど、遊びや運動の楽しさを実感できる取組を工夫する	■新体力テストのソフトボール投げにおいて県平均(5年生以外は、2019年度の県平均)を上回る割合(男女別)を50%以上にする ■「外遊びが、楽しい」と感じる児童を85%以上にする	□自己目標を設定したり職員研修で投げ方のコツを確認したりして各クラスで実践した。2019年度の県平均を上回った割合(男女別)は43.3%であった。目標達成はできていないが、学年平均でみると県平均まで数cmという学年もあり、昨年度より本校全体の投球距離は伸びた。 □児童会の企画による全校遊び集会や、学級レクリエーション等、楽しさを感じられる活動を行った。「外遊びが、楽しい」と感じる児童の割合は92%だった。	3	3	・投球に関する遊び集会や、休憩時間の学級レクリエーション等、遊びから投げることを体験し、「もっと投げたい」という意欲を高める取組を増やしていく。 ・今後も児童会行事や縦割り班の遊び集会等の異学年交流を通じて外遊びの機会を増やしていく。	□児童会の企画による全校遊び集会や、学級レクリエーション等、楽しさを感じられる活動を行った。「外遊びが、楽しい」と感じる児童の割合は92%だった。	3	3	3	・児童会の企画や学級で遊ぶ機会を増やしていくことで、児童の基礎的な体力向上と運動習慣を身に付け、「運動が楽しい」と思える意識にもつなげていく。 ・運動に苦手意識をもっている児童も「楽しい」と感じるような教材や場の設定を工夫した体育の授業を計画していく。
1	授業力と挑戦意欲の向上	継続	互いの個性やよさを生かしながら協働できる教職員	◇児童の「学びの姿」をもとに授業づくりについて話し合い、協働して教材研究を進める ◇部会や学年会を定期的に行い、それぞれの取組を交流する機会を月1回以上設ける	■「日々の授業や子どもの姿について対話している」と答える教職員の割合を前年度(94.1%)以上にする ■「困っているときに相談できる教職員がいる」「学校内の活動について、失敗を恐れずに挑戦しようとしている」と答える教職員の割合を前年度以上(前年度94.1%)にする	□学年で日々の授業や児童の様子について話し合いながら進めている。また、夏季休業中、教材研究の仕方について研修した。授業者全員が授業計画を作成し、気づきを伝えた。「日々の授業や子どもの姿について対話している」と答えた教職員は94.1%であった。 □毎月各部の取組や学年の様子について交流する機会を作っている。また、部会を月一回もち、部内で相談しながら進められるようにした。「困っているときに相談できる人がいる」と答えた教職員は100%、「学校内の活動について、失敗を恐れずに挑戦しようとしている」と答えた教職員は82.4%で目標には達していない。	3	3	・いつでも授業を見合えるようにし、教職員同士で教材研究について話し合う機会を継続して行う。 ・行事等でのそれぞれの役割を明確にし、担当や学年・部などいろいろな場で相談しながら進められるようにする。	・長期休業期間に教材研究の研修を行い、視点について共通認識をもち、話し合いながら研究を進めた。「日々の授業や子どもの姿について対話している」は100%。 ・月一回部会や企画委員会を行い、学校や学年の取組について相談しながら進めてきた。「困っているときに相談できる教職員がいる」は100%、「失敗を恐れずに挑戦しようとしている」は95%であった。	3	4	4	・学年関係なく、授業を見合ったり相談したりして協働して教材研究を行い、授業改善につなげる。 ・お互いの得意なことを交流したり学年会や部会、主任会などで定期的に話し合う機会を作ったりしながら相談しやすい環境を作っていく。	

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準
5	100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度 目標を達成できなかった。